第18回
全国川サミットin横手

秋田県横手市

川がはぐくむ
「ひと・まち・こころ」
～山と川のあるまちから～

報 告 書

©矢口高雄

全国川サミット連絡協議会

目　次

Ⅰ　開催概要 …… 1
１）全国川サミットとは …… 1
①　参加自治体 …… 1
②　全国川サミットのこれまでの開催地 …… 1
２）横手市開催の意義 …… 2

Ⅱ　実施内容
１）７月２４日（金）－第１日目－
①　増田の蔵、まんが館視察 …… 3
②　全国川サミット連絡協議会総会 …… 4
③　首長サミット …… 5
２）７月２５日（土）－第２日目－
①　開会行事 …… 8
②　参加自治体紹介 …… 9
③　基調講演 ～ 石川　好　氏 …… １８
④　午後のオープニング～吉田小学校スクールバンド …… ２１
⑤　事例発表 …… ２２
横手市立横手南小学校かじかっこクラブ …… ２２
横手市立山内中学校自然観察グループ …… ２３
横手市立雄物川中学校 …… ２５
横手川水辺のふれあいフェスタ実行委員会 …… ２６
⑥　記念講演 ～ 矢口高雄　氏 …… ２８
⑦　サミット式典 …… ３１
⑧　展示等 …… ３３
⑨　よこての全国線香花火全国大会 …… ３５
３）７月２６日（日）－第３日目－
①　全国川サミット記念植樹 …… ３６
②　川舟進水式、伝統漁再現 …… ３７
③　わくわくフェア in 雄物川 …… ３８

Ⅲ　第１８回全国川サミット in 横手を振り返って …… ３９

Ⅰ　開催概要

１）　全国川サミットとは

一級河川と同じ名称または一級河川の流域にある全国の自治体が「全国川サミット連絡協議会」を組織し、川がもたらす恵みや人々との関わりを生かしながら、川と共存するまちづくりを進めることを目的に、加盟自治体が持ち回りで開催しています。

平成４年富山県庄川町（現砺波市）で第１回サミットが開催され、今回で１８回目となりました。

①　参加自治体

〈全国川サミット連絡協議会〉

茨城県取手市、群馬県みなかみ町、東京都江戸川区、岐阜県揖斐川町、
岐阜県白川町、兵庫県加古川市、兵庫県猪名川町、新潟県長岡市(ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ参加)、
秋田県横手市

〈雄物川流域県南自治体〉

秋田県湯沢市、秋田県大仙市、秋田県美郷町、秋田県羽後町、秋田県東成瀬村

②　全国川サミットのこれまでの開催地

回　数	開催地	テーマ
第１回	富山県庄川町	川は未来に夢はこぶ
第２回	北海道鵡川町	きらめきリバータウン －川と人の未来を求めて－
第３回	静岡県大井川町	夢と希望あふれる川づくり －川は命、未来の子供たちへ引き継ごう－
第４回	兵庫県加古川市	川はともだち －ひと・まち・川・ちょっと素敵な物語－
第５回	徳島県那賀川町	未来へ語ろう！　私たち川家族
第６回	秋田県雄物川町	川がつなぐ「ひと・まち・こころ」
第７回	宮崎県北川町	思いでいっぱい　不思議がいっぱい －川を彩るホタルの光が子供たちへの贈り物－
第８回	愛媛県肱川町	21 世紀へのメッセージ －それは川から始まる－
第９回	三重県宮川村	川に愛される人になりたい －ちょっとすてきな川家族－
第 10 回	兵庫県揖保川町	歴史に学び明日を見つめる川づくり －ともに創ろう川の未来水の未来－

回　数	開催地	テーマ
第 11 回	東京都江戸川区	暮らしにとけ込む、にぎわいの川 ～都市の中の川を考える～
第 12 回	岡山県加茂川町	森と川が伝える　ふるさとからのメッセージ ～水は生命の源～
第 13 回	奈良県十津川村	みんなで考えよう！　河川環境
第 14 回	兵庫県猪名川町	清流とともに暮らす ～ええやん猪名川５０年～
第 15 回	岐阜県揖斐川町	川面に暮らし　川とともに生きる
第 16 回	東京都江戸川区	川の恵みとその脅威
第 17 回	群馬県みなかみ町	川を活かしたまちづくり　川と交流

２）横手市開催の意義

平成４年から始まった全国川サミットは、平成２１年に１８回目を迎え、秋田県横手市で開催されることとなりました。

平成１７年１０月、新しい横手市は、横手市と平鹿郡の７町村（増田町・平鹿町・雄物川町・大森町・十文字町・山内村・大雄村）の合併により誕生しました。人口 102,220 人、面積 693.04ｋ㎡、雄物川とその支流である成瀬川・皆瀬川・横手川が貫流し、豊かな水と肥沃な土壌により、国内有数の穀倉地帯を形成するとともに、美しい田園風景を醸しだしています。東を奥羽山脈、西を出羽山地に囲まれた横手盆地の中央に位置し、気候は一日の気温格差が大きく風はあまり強くないという特徴があり、典型的な積雪寒冷地で、昭和４９年には中心市街地で積雪２５０㎝を超す豪雪を記録しています。多量の雪は、人々が生活するうえでは厄介なものですが、反面、横手市の環境に潤いをもたらす貴重な水資源となっています。

今回の川サミットは、“川がはぐくむ「ひと・まち・こころ」”をテーマに、全国の自治体からの参加者と市民が川と地域の係わりや川との共生について考え、交流を深めることを目的とし、共に雄物川上中流域にあり、住民生活や産業・文化の面で関係の深い湯沢市･大仙市･美郷町･羽後町･東成瀬村そして横手市が共同で開催しました。雄物川はその名前の由来が「御物成（おものなり＝年貢）を運ぶ川」であったといわれるように、流域の物資輸送の大動脈でもありました。今後も流域の絆を保ちながら共通する行政課題に取り組み、発展していく契機とすることも目的のひとつです。

Ⅱ　実施内容

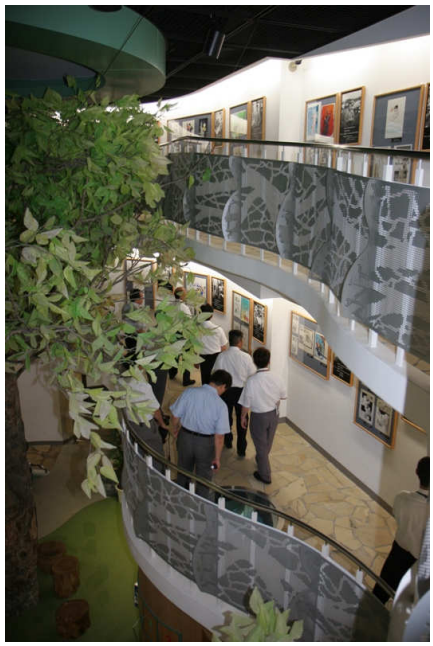
１）　７月２４日（金）－第１日目－

①　増田の蔵、まんが美術館視察

横手市増田町の中心部には、地主や商家のかつての繁栄を伝える歴史的に貴重な内蔵が４０棟以上並んでいます。このうち３棟と、増田町が生んだ漫画家矢口高雄氏の作品のほか、著名な漫画家の原画などを常設展示するまんが美術館の視察を行いました。

↑

←　横手市増田の蔵　視察



↑　まんが美術館　視察　↑

②　全国川サミット連絡協議会総会

横手市増田町の上畑温泉さわらび２階「楓」を会場に参加自治体の代表者が出席し、全国川サミット連絡協議会総会が開催されました。

以下の報告事項及び協議事項について審議され、すべて満場一致で承認されました。

なお、今後の全国川サミット開催予定については、平成２２年度の第１９回サミットの兵庫県加古川市での開催が確認され、さらに第２０回サミットを今回オブザーバー参加である新潟県長岡市で開催することが承認されました。

＜次第＞

会長挨拶　横手市長　五十嵐忠悦
来賓挨拶　国土交通省河川局河川環境課長
中嶋章雅氏

○　参加状況報告
○　議題
◇報告事項
・第１号　第 17 回全国川サミット in 利根川
事業報告について
・第２号　第 17 回全国川サミット in 利根川
収支決算について

◇協議事項
・第１号　第 18 回全国川サミット in 横手事業計画（案）について
・第２号　第 18 回全国川サミット in 横手収支予算（案）について
・第３号　第 18 回全国川サミット in 横手共同宣言（案）について
・第４号　今後の全国川サミット開催予定について

③　首長サミット

国土交通省　河川局
河川環境課長　中嶋章雅氏

はじめに、国土交通省河川局河川環境課長中嶋章雅氏から、「最近の河川環境行政の話題」と題しての講話をいただきました。

ゲリラ豪雨に見られる豪雨災害の変化と地球温暖化が河川環境に与える影響など近年の河川の状況を踏まえ、河川を活かしたまちづくりのための河川環境施策と、治水・利水・環境の視点から総合的な河川管理の必要性についての説明がありました。

続いて参加の各自治体の代表者から、それぞれの自治体での河川に関する取り組みについて発表が行われました。主な内容は以下のとおりです。

☆　秋田県横手市　五十嵐忠悦市長

秋田県が景観に配慮して整備した横手川が市民の憩いの場となり、同時に市民団体が桜の植樹や紫陽花回廊づくり、線香花火大会など川とのふれあいを進める活発な運動を展開しています。今後もダムや堤防整備による安全安心対策と併せて、市民協働の取り組みが必要です。

☆　兵庫県猪名川町　西村悟副町長

大阪・神戸に近接しているため大規模な宅地開発が進んできましたが、川や山は見捨てられて人が近づかない状況になっていました。このため、平成１５年から流域市町村と協力しながら、町を挙げて「清流猪名川を取り戻そう町民運動」を繰り広げてきました。

☆　兵庫県加古川市　樽本庄一市長

川と共に生きるすばらしさを次世代に伝えたいとの思いから、平成２２年９月に第１９回全国川サミットを開催する予定です。

☆　岐阜県白川町　鈴木寿一参事

キャンプ場などアウトドア施設の整備やＥボート大会など、川に親しむ環境づくりを進めてきました。水がきれいになったことから、ホタルの鑑賞場所も増えています。

☆　岐阜県揖斐川町　小森勝義会計管理者

２０１２年に開催される、岐阜清流国体のカヌー会場となることが決まっていますので、町の新たなスポーツとしてカヌーに取り組んでいきます。

川づくりは山づくり、森づくりからと、その山で採れた木の実を苗木に育て、山に戻そうという活動を進めています。

☆　東京都江戸川区　土屋信行土木部長

４年後東京で開催される国体のレガッタ競技の誘致活動を行ってきましたが、ほぼ決定しましたので、今後、川の整備を進めます。また、江戸時代に舟運のために作られた新川に、１１の木橋を整備する事業を進めています。秩父山系と利根川上流部の間伐材を使用することで、上下流の交流と山の保全を図りたいと考えています。

江戸川区には、綾瀬川など国直轄と東京都が別々に管理している一級河川がありますが、できれば国にイニシアティブを取っていただければと思います。

☆　国土交通省河川局河川環境課長　中嶋雅章氏

地方分権の考えを基本にしながら、それぞれの河川の歴史と実態に合わせ管理していく必要があると思います。

☆　群馬県みなかみ町　腰越孝夫副町長

昨年、「みなかみ水環境力宣言」を行い、水を守り・生かし・広めていくことを三つの柱に、首都圏を含む中下流２，９００万人の命を守る役割を担っていることを自覚しながら、森を守るためいろいろな事業を展開しています。

☆　秋田県湯沢市　阿部賢一副市長

湯沢市は、温泉などの観光資源と、うどんや漆器・仏壇などの独自の地場産業を持っています。

秋田県最大の流域面積を持つ雄物川の源流にあり、下流にきれいな水を流すための環境整備と市民が川に親しめる環境づくりに力を入れています。

☆　秋田県大仙市　栗林次美市長

本日参加の秋田県の各自治体は雄物川流域にあり、堤防整備など河川改修事業、成瀬ダムの建設を促進する活動を進めています。国土交通省では向こう３０年間の河川整備の指針である雄物川河川整備計画を策定中ですので、これに期待し、今後も各自治体が連携して事業推進にあたってまいります。

☆　国土交通省東北地方整備局
　　河川部長　田中澄雄氏

河川整備は、堤防・ダムなどすべて連動して成り立っています。雄物川に関しては、これまで人口が集中している下流部の整備が優先されてきましたが、今後は現在事業が行われている中流部が整備の中心になると思います。上流のダムにつきましても、皆さんの声を期待しているところです。

☆　秋田県美郷町　佐々木敬治副町長

水は町民の共有の財産であるとの考えから、平成２０年３月に水環境保全条例を制定したところです。「水を守ろう・水に学ぼう・水を楽しもう」を３本柱に、水源涵養などの様々な事業や学校教育・社会教育との連携を組み合わせた水環境プロジェクトを実施中です。

☆　秋田県羽後町　佐藤孝治副町長

国土交通省のご協力により堤防整備が行われ、幸い無堤個所は１か所のみとなっています。雄物川上流の町として、土地改良区・森林組合・学校が協力して水源涵養のため山に木を植え、魚のつかみ取りなど川の恵みを体感する体験学習を進めています。

以上のとおり、各自治体の代表者からは川とまちづくりに対する発表があり、これを受けて、国交省河川局河川環境課長中嶋章雅氏と、同東北地方整備局河川部長田上澄雄氏からも、河川行政を司る立場からアドバイスが送られ、中身の濃い意見交換となりました。

２）　７月２５日（土）－第２日目－

第１８回全国川サミット in 横手

会　場：秋田ふるさと村ドーム劇場

参加者：６５０人

①　開会行事

・御嶽清流太鼓演奏（御嶽清流太鼓保存会）

・歓迎挨拶　　横手市長　五十嵐忠悦

・来賓祝辞　　国土交通省東北地方整備局河川部長　田上澄雄氏

・　〃　　秋田県平鹿地域振興局長　青木満氏

歓迎挨拶
横手市長

来賓祝辞　国土交通省
東北地方整備局河川部長

来賓祝辞
秋田県平鹿地域振興局長

オープニング
御嶽清流太鼓保存会

②　参加自治体紹介

全国川サミット参加１４自治体の「川の恵み」をスクリーンで紹介後、各自治体の代表者がそれぞれのまちの特徴や独自の取り組みについて発表しました。

１　茨城県　取手市　（とりでし）

利根川小堀（おおほり）の渡し

（概要）

平成１７年３月に、取手市と藤代町が合併し、人口 113,000 人の新生「取手市」が誕生しました。取手市は、茨城県の南端に位置し、東西 9.3km、南北 14.4km であり、利根川とその支流である小貝川の二大河川が流れる水と緑に恵まれた地域です。茨城県の南部の玄関口としてばかりでなく、東京、成田、つくばを結ぶ三角形のほぼ中央に位置していることから交通の要となっており、首都圏の都市の中でも、交通の利便性と自然環境に恵まれた都市環境をもっています。

都市の将来像として定めた「水と緑を育み、美と文化を創る活き活きリビングタウン」の実現に向け、大胆な発想と創意工夫をもって活気あるまちづくりの創造に取り組んでいます。

利根川小堀（おおほり）の渡し

（川の恵み１）

明治末期の利根川大改修工事の結果、千葉県側になってしまった小堀地区の住民たちが大正３年から自分たちの手で渡しを始めました。昭和４２年から市営になり、今では一日７便、常時運行している渡し船です。

また、かつて水戸街道の「取手の渡し」があった箇所に、新設の桟橋ができたことから、３点間を結ぶ渡しとして、今では、だれでも１運航経路１００円で乗船できます。

とりで利根川大花火

（川の恵み２）

昭和５年、国道６号利根川大橋の開通を記念して始まった伝統の花火大会。雄大な利根川の夜空を彩る七色の光と音の祭典です。毎年、利根川の広い河川敷には、市内外から１０万人の見物客が訪れ、利根川に映える花火の美しさに見とれます。今年も８月８日の土曜日に開催します。皆様のおこしをお待ちしております。

２　群馬県　みなかみ町　（みなかみまち）

谷川岳一ノ倉沢

（概要）

みなかみ町は、平成１７年１０月に３町村が合併し誕生した「利根川源流の町」です。谷川岳をはじめとする上越国境の山々に連なる雄大な自然の懐には、矢木沢ダムなどの５つのダムがあり、首都圏の水瓶として利根川流域 3,000 万人の生命と暮らしを支える重要な責務を担っています。利根川（坂東太郎）と赤谷川の河岸段丘に沿って発展してきたみなかみ町。谷川岳の「一ノ倉沢・マチガ沢」に代表されるような国内第一級の山岳地や森林、涼風がそよぎ清らかな水が流れ、蛍が舞う美しい田園、町内各地に湧き出る豊富な温泉などの大自然の恵みを地域の資源として活かしつつ、水源の地に住む私たち町民一人ひとりが「環境力」を身につけ、環境保全の責務を果たすことをめざして『みなかみ・水・「環境力」宣言』をしています。

 月夜野大橋より谷川岳を望む	（川の恵み１） みなかみ町は、日本一の流域面積を誇る坂東太郎（利根川）が町の中央を流れ、その源は群馬、新潟両県の県境大水上山(おおみなかみやま)に発しており、まさに「利根川源流のまち」です。町名は、若山牧水の「みなかみ紀行」から命名されました。 水と森を育むまち「みなかみ」は、「水」の故郷として、また、首都圏 3,000 万人のこころの「ふるさと」として親しまれ、町民一人ひとりが誇れるようなまちづくりを進めています。
 ラフティング	（川の恵み２） 最近ではアウトドアスポーツが盛んになり、利根川では、激流をゴムボートで下る「ラフティング」、川版ボディーボードの「ハイドロスピード」などの体験が楽しめ、シーズンには多くの若者が集まっています。また、ＮＨＫ杯全日本選抜カヌースラローム大会など多くの全国大会が開催されております。

３　東京都　江戸川区　（えどがわく）

 江戸川区全景	（概要） 江戸川区は東京都の東端部に位置し、西に荒川、東に江戸川など７つの一級河川と海に囲まれた水辺環境の豊かなまちです。全国の親水公園の先駆けとなった古川をはじめ、区内には総延長２７km の親水公園、親水緑道が流れ、潤いのある快適な都市空間を実現しています。 その豊かな水辺を舞台に、昨年には、「海抜ゼロメートル世界都市サミット」を開催するなど、川とのふれあいや自然環境の保護、育成に努め、新たな都会の水辺環境を創出しています。さらに、災害に強い江戸川区を目指し、区民の皆さんと協働でスーパー堤防整備にも積極的に取り組み、安全で安心なまちづくりを進めています。
 江戸川親水公園	（川の恵み１） 多くの親水公園、親水緑道が縦横に流れ潤い空間を実現し、ボートやカヌーといった水上スポーツにも盛んに利用されています。また、後世の人々が安心して暮らすことのできる水害に強いを街づくり進めています。

４　岐阜県　揖斐川町　（いびがわちょう）

 揖斐川	（概要） 岐阜県揖斐郡揖斐川町は、岐阜県の最西部に位置し、北側は福井県、西側は滋賀県と接し、揖斐川町の南西部から北西部にかけては、標高 1,100～1,300m 前後の山々がそびえ、その山間を縫うように揖斐川が流れます。また、揖斐川町の南東部は、濃尾平野の最北端に位置する平坦地となっており、市街地及び田園地帯となっています。日本最大の総貯水量を誇る徳山ダムは、水力発電による電力供給と治水の重要な役割を果たすとともに、日本一美しいといわれるダム湖が、観光拠点として期待されています。揖斐川により生み出される自然資源は、下流域の水源であるとともに、人と自然との共生が求められる２１世紀の貴重な地域空間となっています。

 観光やな	（川の恵み１） 揖斐川町は、揖斐川の全長 121km のうち、上流半分を占める、その名のとおり川の町です。この地に暮らす人々は母なる清流に抱かれ、ときには水害に苦しめられることもありましたが、農業用水をはじめ、生活用水、工業用水、環境浄化などその恩恵ははかりしれないものがあります。 清流揖斐川には、イワナやアマゴ、アユなどの魚が生息する環境が保たれ、これらの自然環境を生かした、魚釣りや水遊びなどを楽しむことができ、揖斐川沿いにある「観光やな」では、夏から秋にかけて鮎料理を食べることができます。
 いびがわマラソン	（川の恵み２） 愛知県、岐阜県、三重県の東海三県で初の日本陸上競技連盟公認のフルマラソンコースを使用した市民マラソン。毎年１１月開催。今年で２２回目を迎え、昨年は 7,700 人を超えるランナーでにぎわいました。 紅葉が美しい山々、そして眼下には、清らかで美しい揖斐川、この両方を楽しみながら走るマラソンコースに魅せられて、全国各地から多くのランナーが揖斐川町に集います。 いびがわマラソンでは、「おもてなしの心」に加え、「おかげさま＝感謝の心」を大切にして、より多くのランナーをお迎えします。

５　岐阜県　白川町　（しらかわちょう）

 白川茶	（概要） とびっきりの清流と豊かな緑が自慢の白川町。近年、美しい自然を生かした観光・レクリェーションエリアとして脚光を集めています。また、豊かな山林資源を生かした木材産業や、山間に流れる清流が生み出す独自の気候風土を生かしたお茶の栽培が盛んです。
 カワゲラウォッチング	（川の恵み１） 白川町は、自然豊かな地域で名前のとおり川に恵まれた町です。大小の河川がたくさんあり、毎年水生生物による河川の水質調査として「カワゲラウオッチング」を行っています。この事業は小中学生をはじめとする住民の参加を得て、身近な河川にすむ生物を調べることにより河川の水質を調査をするものです。本町の大切な財産である河川をいつまでも美しく保つことの大切さや重要性を伝えています。その他にも地域の「川を守る会」の方による清掃活動など行われ環境美化の輪を広げています。
 Ｅボート交流会	（川の恵み２） 白川町には大小の河川がたくさんありますがそのうち代表的な河川は白川、飛騨川、佐見川、黒川、赤川の５つです。その中の飛騨川では、９月にＥボート交流会を開催します。この交流会では地域で共有する貴重な財産である「飛騨川」をＥボートにより体感し川を学び、川と遊びながら飛騨・木曽川・伊勢湾を通じた地域連携を進め、交流を深めています。

６　兵庫県　加古川市　（かこがわし）

加古川俯瞰

（概要）
加古川市は、県下最大の一級河川「加古川」の水の恵みを受けて発展してきた都市です。古くは江戸時代、山陽道の宿場町「加古川宿」として、本陣・陣屋が設けられ、高瀬舟の往来でにぎわいました。現在、海岸線には、わが国有数の鉄鋼工場があり、内陸部には、伝統を生かした靴下・建具など特色ある地場産業が営まれています。また、まちの玄関口ともいうべきＪＲ加古川駅や東加古川駅周辺では、再開発により都市機能の充実を図る一方、国宝・重要文化財を多数所蔵する鶴林寺(かくりんじ)などの神社仏閣や手軽な登山が楽しめる高御位山などを保全し、文化や自然との調和もあわせた「ひと・まち・自然がきらめく清流文化都市」の実現に向け躍進しています。

水管橋

（川の恵み１）
加古川の水の恵みにより、古くは播磨国風土記にも地名が見られるように、当地は播磨地域の中心地として栄え、江戸時代には本陣・陣屋を利用する旅人の往来により、加古川を渡す高瀬舟の舟運で賑わいました。また、１日に約１６万トン臨海部の工業地帯へ送水される加古川の水は、明治における産業の近代化とともに繊維業を振興、戦後には我が国有数の製鉄工場が立地し、鉄鋼業を中心に播磨臨海工業地帯の拠点都市を形成して復興を支えました。このように加古川の水の恵みは、今も加古川市のものづくりを育んでいます。

漕艇センター

（川の恵み２）
まちの中央を流れるこの一級河川は、加古川市のシンボルとして市民に愛されています。河川敷にはテニスコートやグラウンドなどが整備され、加古川まつり花火大会やツーデーマーチ、市民レガッタなど、地域に定着した大型イベントにも広く活用されるほか、川をテーマに全国から公募する川の絵画大賞展の開催等、「ひと・まち・自然がきらめく清流文化都市」の実現に向け、さまざまなスポーツ・文化事業を展開しています。

７　兵庫県　猪名川町　（いながわちょう）

猪名川で遊ぶ子どもたち

（概要）
猪名川町は、兵庫県の南東部に位置する昭和３０年４月に誕生した町です。昭和５０年代から町南部を中心に住宅開発が進み、大阪市内まで電車で約４０分という地理的条件から阪神地域のベッドタウンとして発展しました。町の最北部には、猪名川の源流である標高７５３ｍの大野山があり、豊かな自然と都市機能が調和したまち並みが魅力の一つです。木喰明満上人が逗留した地で仏像を奉納した木喰物は、明満上人最晩年の円熟した作で、微笑仏と呼ばれ親しまれており、また国の重要文化財の戸隠神社や、豊臣政権の台所を支え、奈良大仏鋳造に鋼を献じたという伝承もある多田銀銅山などが今も残り、国土交通省の歴史街道モデル事業の対象地区に認定されるなど、歴史ロマンに彩られた町です。平成１７年に「全国川サミット in 猪名川」を開催し、町名にもなっている猪名川を“清流猪名川”として子どもが安全に遊べる川、誰からも親しまれる川にしようと住民主体の「清流猪名川を取り戻そう町民運動」に取り組んでいます。

 大島であい親水公園	（川の恵み１） 猪名川の河川敷には、３箇所の親水公園が整備されており、憩いと安らぎの場として、夏休みなど休日には町内外から多くの家族連れが“川遊び”に訪れる人気のスポットになっています。
 屏風岩	（川の恵み２） 猪名川渓谷自然公園の清流に高さ３０ｍ、幅１００ｍにおよぶ岸壁が、屏風のようにそそり立ちみごとな景観をつくり出していることからその名がつけられた奇石。日没後のライトアップが幻想的な雰囲気を醸し出します。屏風岩の周辺は豊かな緑に包まれ、春には桜、夏は蛍、秋は紅葉、冬は雪と、自然が織りなす四季折々の姿を見ることができます。町の自然と調和した文化を象徴するかのように、猪名川の清流に静かにたたずんでいます。

８　新潟県　長岡市　（ながおかし）

 米百俵の群像	（概要） 長岡市は、日本一の大河・信濃川が市内中央をゆったりと流れ、市域は守門岳から日本海まで広がる人口２８万人のまちです。平成１７年度に９市町村と合併しました。地域の歴史や祭り、四季折々の自然など、個性ある１０の地域の魅力が輝きます。中越大震災をはじめとした相次ぐ災害にも、「米百俵」の精神を受け継ぐ市民の力で復興を成し遂げています。 長岡市は、「前より前へ！長岡人が育ち地域が輝く」を合言葉に、「市民力」「地域力」そして「市民協働」のパワーで、新たな価値を生み出す「創造的復興」に取り組んでいます。
 信濃川と長生橋	（川の恵み１） 日本一長い大河・信濃川は、長岡市のほぼ中央を南北に貫流し、長岡市を中心とする新潟県中越地方における様々な産業を支えるとともに、伝統と文化を育んできました。 現在、信濃川の川沿いは、桜づつみや水辺プラザのほか、両岸の高水敷には野球場やサッカー場などの各種スポーツ広場等が整備されているとともに、堤防の緩傾斜化も進められており、多くの市民から散策やスポーツ、憩いの場として大いに利用されています。
 長岡まつり大花火大会	（川の恵み２） 夏の一大イベントである長岡まつり大花火大会の会場としても利用され、打ち上げられる二万発の花火、特に正三尺玉や中越大震災からの復興を祈念して始められたフェニックス花火などが有名で、毎年、全国各地から約８０万人が訪れています。

９　秋田県　横手市　（よこてし）

増田の冬

（概要）

平成１７年１０月の８市町村合併による新横手市誕生から４年が経過し、市民の間には横手市としての一体感が確実に醸成されつつあります。

流域面積全国 13 位の雄物川の流域に発達した横手市は、水の恵みに彩られた町でもあります。代表的な冬の祭りかまくらは、水神様を祀ります。東北有数の豪雪は、春には豊富な雪解け水となって田畑を潤し、人々の生活を支えてきました。伝統的な川の漁は今も健在、釣りキチ三平が駆け回った渓流もそのままです。

横手市は「豊かな自然・豊かな心・夢あふれる田園都市」を将来像に掲げ、生活基盤の整備に力を注ぐ一方、麹を中心とする発酵文化を守り育てる､「食と農からのまちづくり」を進めています。今年９月１９･２０日の両日横手市で開催されるＢ級ご当地グルメの祭典「Ｂ－１グランプリ inＹＯＫＯＴＥ」にも市民の期待が集まっています。

横手川蛇の崎橋･蛇の崎川原（じゃのさきばし　じゃのさきがわら）

（川の恵み１）

城下町横手市の市街地は、雄物川の支流である横手川を中心にまちが形作られました。１７世紀には横手川をはさんで武家の住まいである内町（うちまち）と町人の町屋が並ぶ外町（そとまち）が形成され、現在も当時のまち並みが多く残っています。蛇の崎橋と蛇の崎川原は市街地の中心にあり、市民の憩いの場として、夏の送り盆祭りやねむり流し、さらに本日午後６時から開催される、全国線香花火大会の会場として多くの人々を集めています。

雄物川河川公園

（川の恵み２）

雄物川河川公園は､河川敷に整備された約２０ha の親水公園で、せせらぎ水路や広大な芝生広場､､遊具などが整備されており、水遊び、キャンプやバーベキュー、グラウンドゴルフなど、幼児から高齢者まで連日多くの利用者でにぎわっています。

明日は、午前９時３０分から「わくわくフェア in 雄物川」が開催され、本サミットの記念植樹式や超神ネイガーショーやイワナのつかみ取り、熱気球体験飛行など多彩な催しが行われます。

１０　秋田県　湯沢市　（ゆざわし）

七夕絵どうろうまつり

（概要）

湯沢市は、山形県、宮城県に隣接する秋田県最南東部に位置し、県都秋田市へは直線距離で約７０㎞、宮城県仙台市へも同じく約９５㎞に位置しています。隣接する両県とは、国道１３号、１０８号及び３９８号で結ばれており、秋田県の南の玄関口となっています。また、面積は 790.72ｋ㎡で、秋田県の面積の約 6.8%を占めています。

東方の奥羽山脈、西方の出羽丘陵に囲まれた横手盆地を貫流する雄物川と、その支流である皆瀬川、役内川沿いに豊かな水田地帯を形成しています。県境付近の西栗駒一帯は、雄大な自然林を有しているほか、豊富な温泉群にも恵まれております。

気候は、内陸性で気温の差が大きく、四季折々の自然美を見せてくれます。

 上水道	（川の恵み１） 雄物川の最上流に位置する湯沢市では、雄物川の伏流水を上水道水源に利用しています。 写真は雄物川右岸堤内地にある関口水源です。ここでは、最大9,719 ㎥／日の伏流水を、塩素滅菌し飲料水にしております。雄物川の恵みにより、市民に安全で良質な水が　供給できております。
 湯沢大堰	（川の恵み２） 湯沢大堰は雄物川から取水し、市の中心街を６km に渡り流れる灌漑用水路です。４００年前に開削され、測量技術が進んでいない時代に、地形勾配を勘案し引水しており、先人の辛苦と努力がしのばれます。これにより、市街地や周辺地域の開発が急速に進展したものと推測されます。現在は、灌漑用水のみならず防火・生活用水、克雪対策として重要な役割を果たしています。

１１　秋田県　大仙市　（だいせんし）

 国指定重要無形民俗文化財 「刈和野の大綱引き」	（概要） 大仙市は、平成１７年３月に大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町の１市６町１村が合併し誕生しました。秋田県内陸南部に位置し、古くから県南の交通の要衝であり、秋田新幹線などの利用により首都圏からの一日行動圏にあるなど、多彩な交流が可能な立地にあります。東に奥羽山脈、西に出羽丘陵が縦走し、雄物川と玉川に沿った風光明媚な地域であり、県内有数のあきたこまちの生産地でもあります。 「人が活き人が集う夢ある田園交流都市」を将来都市像として掲げ、地方分権時代にふさわしい住民主体のまちづくりを目指して取り組んでおります。
 全国花火競技大会 「大曲の花火」	（川の恵み１） 毎年８月第４土曜日、観覧者で埋め尽された雄物川河川敷に、全国から選び抜かれた花火師たちが結集し、その技と華麗さを競う、歴史・質の高さ日本一とも言われる花火競技大会。明治４３年が始まりとされ、戦争などで一時中断はありましたが、今年で第８３回を数えます。手前に雄物川、背景に西山(ﾆｼﾔﾏ)といった花火鑑賞には絶好のロケーションで、大迫力の音と光の芸術は観る人々を魅了します。歴史と伝統に培われ、全国でも屈指の内容と規模に成長した「大曲の花火」は、観る人すべてに深い感動と喜びを与える夏の一大イベントです。～「百聞は一見にしかず」８月２２日は「大曲の花火」に是非お越しください。
 川を渡るぼんでん	（川の恵み２） 雄物川をゆったり渡るぼんでん。数あるぼんでん奉納の中でも、ぼんでんを船に乗せ川を渡るのは、花館(ﾊﾅﾀﾞﾃ)地区だけ。川面に映る赤、青、黄など色とりどりのぼんでんと一面の銀世界が絶妙のコントラストを演出し、詩情豊かな光景を作り出します。 江戸時代後期、当時花館村の名主によって始められたと伝えられる「川を渡るぼんでん」は、五穀豊穣を祈願する行事で、雄物川を渡り標高２１０メートルの伊豆山(ｲｽﾞｻﾝ)神社に奉納されます。毎年２月１１日に行われ、川を渡る優雅な面と、雪深い急勾配の山道を登り激しくもみあう面の、優しさと厳しさの２つの顔を持つ伝統行事です。

１２　秋田県　美郷町　（みさとちょう）

六郷湧水群（御台所清水）

（概要）

美郷町は「平成の大合併」秋田県第１号として、平成１６年１１月１日に旧千畑町、旧六郷町、旧仙南村の３町村が合併して誕生しました。

東には奥羽山脈が連なり、町の西側は標高４０メートルから５０メートルの発達した扇状地の扇端部にあって、豊かな土壌に恵まれた県内有数の穀倉地帯を形成しています。名水百選に選ばれた「六郷湧水群」、期間中５万人を越える観光客が訪れる「千畑ラベンダー園」、平安時代の末期に清原氏一族の内紛に端を発した「後三年の役古戦場」など、観光名所の豊富な地域でもあります。

美郷町は「融和と前進」をキーワードに、それぞれの地域が長い時間をかけて培ってきた歴史と伝統文化、気風、様々な社会資本など地域固有の特徴を大切にしながら、町民と行政が一体となって未来に夢と希望を持てるまちづくりを目指しています。

美郷町仙南地区
「出川」水辺環境クリーンアップ作戦

（川の恵み１）

美郷町の「水を守ろうプロジェクト」の一環として、仙南地区を流れる出川で河川クリーンアップ作戦が行われました。
約８０人の参加者が３班にわかれ、およそ２ｋｍの区間を２時間かけて清掃しました。

回収されたゴミは２ｔトラック２台分。空き缶などの家庭ゴミや肥料袋などの農業ゴミばかりでなく、古タイヤやホイールなども捨てられており、参加者からは「思ったよりゴミで汚れていた。」「実際に川に入ってみないとわからないものだ。」などの声があがっていました。

美郷町六郷地区
「丸子川」水環境学習交流

（川の恵み２）

美郷町の「水を楽しもうプロジェクト」の一環として、毎年茨城県つくば市と本町の小学生による環境学習交流が行われています。

昨年は、８月１日から４日間の日程で交流が行われ、美郷町内を流れる丸子川の水質調査や水生生物調査等を実施しました。

両市町の子供たちにとっては、日常生活での水とのかかわり方の重要さを改めて認識する貴重な機会となりました。

１３　秋田県　羽後町　（うごまち）

国指定重要無形民俗文化財
「西馬音内盆踊り」

（概要）

秋田県南部に位置し、東西約１９．０km、南北約１９．５kmの略正方形をなし、横手盆地を一望できる五輪坂地区に、昭和５３年レクリエーション施設五輪坂ハイツを整備。以後、ミニスキー場・アルカディア公園・スポーツガーデンに加え、平成１０年には温泉保養施設を整備するなど、観光交流エリアの拡充に努めています。

また、平成１７年８月、国指定重要無形民俗文化財「西馬音内盆踊り」の拠点施設「西馬音内盆踊り会館」が完成し、盆踊りの通年体験が可能となったほか、特産の黒毛和牛を使った「うご牛まつり」、冬の「ゆきとぴあ七曲花嫁道中」など各種のイベントを開催し、観光振興に努めています。

１４　秋田県　東成瀬村　（ひがしなるせむら）

栗駒山荘
（露天風呂からの眺望）

（概要）
東成瀬村は秋田県の東南端に位置し、東は奥羽山脈を境に岩手県、南は宮城県に接しており、東西に１７km、南北に３０km と細長い地形をなしています。
栗駒山系の山々に抱かれた東成瀬村には随所に四季折々の素晴らしい表情を見せる景勝地があり、訪れた人々に感動と安らぎをもたらしてくれます。
その中のひとつ、栗駒国定公園内にある須川温泉「栗駒山荘」の露天風呂から眺める出羽富士（鳥海山）や雄大な景色は一見の価値があります。
また、奥羽山脈の自然地形を生かして整備した「ジュネス栗駒スキー場」は、県内でも有数の広大なスキー場としてにぎわっており、夏場はスキー場の裏側にあたる「ジュネス栗駒カントリーパーク」で、個性あふれる本格的な３６ホールのパークゴルフが楽しめます。

仙人修行

（川の恵み１）
すっかり夏の風物詩となった「仙人修行」は今年で２６回目を迎えます。毎年北は北海道、南は広島、時には海外からも参加者が現れるほどの人気イベント。
その人気イベント「仙人修行」の中でもメインイベントとされているのが不動滝で行われる「滝打たれ」修行。
清らかな川（滝）の水で邪念を払う。精神的にも「川の恵み」を受けています。
今年の「仙人修行」は７月３１日～８月２日に行われます。

成瀬川渓流つり大会

（川の恵み２）
村を縦断するように流れる成瀬川。そこには川の恵みをふんだんに受けた天然のイワナやヤマメが生息しています。
その成瀬川では毎年６月第３日曜日に渓流つり大会が開かれ、県内外から多くの太公望が集結。
今年も上位５名が５０ｃｍを超えるニジマスをつり上げるなど、大会は盛り上がりました。

③　基調講演

○　テーマ　「川と人々のくらし」
○　講演者　作家　ノースアジア大学客員教授　石川　好　氏

本日のテーマが川についてということで、私の名前が石川なのでこういう講演場所には最適です。その下に好むという字がついており、あまりにも話ができすぎている感じがしますが･･･。

１８回目を迎える全国川サミットということで、実際に人間の歴史をひも解いてみると、川というものほど人間にとって重要なものはありません。

人類史の四大文明といわれている黄河文明、インダス文明、チグリス川・ユーフラテス川のメソポタミア文明、ナイル川のエジプト文明は、すべて川沿いにあるわけです。考えてみれば人間というのは川があって初めて文明を作り上げ今日に至っていて、川抜きでは人間は生きていると考えられないといっても過言ではないと思っています。

みなさん、ご存知かと思いますが、中国には５６もの民族がいて、一番大きいのは漢民族で、この「漢」という言葉は単純に言うと川沿いに住む人々という意味なのです。漢民族の「漢」というのは黄河流域に住む人々という意味しかないのです。つまり、中国を支配している、中国で最大の人口を抱える漢民族というのは本来の意味が川の人々という意味なのです。

中国の最初の伝説、夏王朝の伝説の銘文がどういうものかというと、その黄河流域で起こる洪水を管理できた人、“国土交通省河川局長”と言ってみればいいかもしれませんが、どういう風にすれば荒れ狂う黄河の水をうまくなだめて流せるか、そういう土木工事ができる人というものが、中国の歴史にあらわれる最初の銘文なのです。政治というものは「治水」と言われるように、水を治める人というのが古代中国の最初の考え方であります。このくらい「水」というものは中国においては大変重要な意味を持っているのです。

本日は川サミットで、川というキーワードでどうやってまちづくりをしたり、暮らしを考えるかということがテーマですが、日本の誇れるものの一つは間違いなく水（川）です。ペリーが開国を求めてきたことの中にいろいろな理由がありますが、最大の理由は水なのです。黒船で到着したペリーは、下田で領事館に滞在していますが、この時の日記を読むとおもしろいことが書かれています。「領事館の前に用水路があり、そこにちょろちょろ流れている水ですら飲める。そして、その水の美しさと言ったら、我々はアメリカで大変な文明、文化を作っているが、この水にかなわないのではないか。」そんな内容に近いことを日記に書いています。いい水を生み出す文化を日本人は持っていたのです。

そういうことがあり、いい水の作り方、保水のやり方というものは日本人の遺伝子とし

てもってきました。ご存じだと思いますが、水がなければ工業はできません。我々は簡単に日本の技術を誇りますが、いい水があるからこそ日本の工業技術が非常に発達したということを忘れてはいけません。つまり、工業用水、農業用水、生活用水と水そのものの役割が分けられていますが、いい水をちゃんと共有できるシステムというものが、古代のみならず近代になっても、相当なレベルがあるということが日本の今日の工業文明を作ったと言えます。

日本人にとって川というものは何か風景として、あるいは感受性の中の川のようにも思えます。山本七平という人の「日本人は水と安全はタダだと思っている」という有名な言葉がありますが、それはこれだけ川がちゃんとあって、ちゃんと川が水を運んで枯れない中で、我々が水をタダだと思っていると同時に、川のありがたさというものをどこかで忘れてしまったのではないかという意味です。

本日は茨城県代表の方はいらしていますか？少しだけ失礼な話になりますが、秋田県は嘘か誠か分りませんが、「秋田美人」と言われるくらい、日本で一番美人が多いと言葉としては誰でも知っています。島根美人、香川美人、名古屋美人という言葉は聞いたことがありませんが、幸か不幸か嘘か誠か秋田美人という言葉は全国に通用します。日本一の美人は秋田県ですが、日本一不美人な県はどこだと思いますか？

実は茨城県なんです。これも、どこに根拠があるか分かりませんが、そういうことになっています。ところが、佐竹藩は茨城からきているのです。一番の不美人県から来た人たちの末裔がなぜ日本一の美人県になったのか。これは、秋田の水が良かったからではないか、突然変異かどうかわかりませんが、おそらくそういう風になったとしか説明がつかないのではないか、これは水を抜きにしては考えられないのではないかと思います。

我々は、よくこういう言い方をします。「川を守ろう。」「自然を守ろう。」この守ろうという言葉自体そのものが人間の傲慢さを表しているのです。我々は、川を守ることも自然を守ることもできません。彼らによって守られているのです。つまり、魚が泳ぐことのできる水だからこそ我々は生きていられるのです。この日本中の川に魚が、生き物が生きていることのできない川であれば、我々は生きていくことはできません。

日本の川づくり、川の河川行政に関しても、大変批判があることを我々は知っています。こんなところまでセメントを流し込まなくてもいいじゃないかという意見があります。秋田に来ても、山形に行っても、時間があると山の中に入って行って、小さな川を見ていると、やはりセメントが流し込まれていると嫌になってしまいます。しかし自然は恐ろしいだけではない、自然はそういう恐ろしさをもっているからこそ自然として生き延びるということを地球上で繰り返しているのです。これは我々が、どれくらいの許容量を持って災害と言っているかわかりませんが、自然にとってみればそれは当り前のことなのです。何十年に 1 回大洪水を起こして、地ならしをして、土地をもう一度作りかえることは、ひとつの人間とは別の自然のメカニズムが働いているわけですから、それに対して文明を作った人間はどうやって自然とうまくやっていくのか、そういったことがおそらく世界中の行政体の中に河川局、水道局、整備局などが置かれている理由なのです。

こうして川サミットというものをやりながら、我々が日本の生活の中で、水と暮らし、国土と水、国土と川、そういったことを考えることは、日本という国にとって基本的な

教養のはずなのです。この資源の乏しい日本において、日本人として自覚的に生きていくということは水というものに対する基本的な知識、基本的な認識というものを持っていることであり、良き日本人とは一体何であるか、この日本の国土で生きている人間とはなんであるかと言ったときに、この日本という国の中でもっとも重要な水、すなわち川を含めた水に対する基本的な知識というものを共有し合っていくということ、これは日本人の教養として数えておくべきことなのです。そういう意味で、こうやって河川局、国土交通省中心に、あるいは各自治体が川、水に縁のある地域が集まって改めて川や水のことを考えながら、そして時には子供たちに見せ、触れさせるということは、日本人の教養として大変重要な仕事ではないかと私は思っています。

私は日中青年交流で中国の高校生たちを日本に呼び、日本のことを経験させるプロジェクトをやりました。中国の高校生たちが一様に感心することはというと、緑の美しさと水のきれいさです。東北や信州の山の中に水が流れている美しい風景は世界でも例外に美しい風景なのです。この風景が成立する条件というのは川があるからなのです。どんなところに行っても小さな川でもちゃんと流れている、きれいな水が流れ続けている、これは川を大事にしてきた日本人の誇りであり、これからも大事にしていかなければならないことだと思います。

我々の国が近代になってこれだけの文明を持ち続けられていたというのは、水がよかった、いい水があったということです。我々の古代以来からの成功というのは、ちゃんと管理するものを遺伝子的にも持っていて、そしてそれをうまく制御するような行政の仕組みを作り続けてきたということだと思います。それはすなわち、政治というものが治水、水を治めることであり、文明が常に川の周辺から起こってきたことを考えてみると、我々の日本というものは巨大な四大文明と言われるような巨大な川を持ち合わせていないところで成立した、小さい川だけの列島から成立した例外的な文明で、日本文明というものをつくりあげることができたのは、川のおかげではないかと改めて認識する必要があると思います。

いずれにしても、川というものから我々は離れたところで生きられないということを確認することで、この横手の川サミットが大きな影響力を持ち、そして、地域の方々が協力し、ここに参加してくださった自治体の方々が改めて川と町についての考え方が確認できれば、このサミットというものは成功に終わるのではないかということで、私の話を終わらせていただきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

④　午後のオープニング

横手市立吉田小学校
　　スクールバンド

⑤　事例発表

川に関する調査研究を行っている市内の小中学校及び川を通じた市民活動を行っている団体から、事例発表をしていただきました。

（ア）「横手川流域におけるカジカガエルの調査研究報告」
横手市立横手南小学校かじかっこクラブ

横手南小学校の前を流れる横手川は雄物川の支流で、「山と川のあるまち」のシンボルとなる川です。「横手の自然(1999 年)」によると「横手川にカジカガエルが住む」とされていましたが、ここ数年、理科学習や総合的な学習、生活科の時間における観察活動では発見した人がいませんでした。

私たちは「本当に横手川にカジカガエルは住んでいるのか？」、「住んでいるとすれば何処に住んでいるのか？」を調べ、横手市の環境を知る手がかりになればと思い３年前から「カジカガエルの生育範囲と周辺環境の調査」を始めました。

研究のテーマを、①「カジカガエルの生息範囲を特定する」②「カジカガエルの住む場所の水質、周辺環境を調べ生息する条件を割り出す」③「カジカガエルや他のカエルのオタマジャクシを飼育観察し生態をくわしく調べる」ことにしました。

調査地域は、学校周辺の横手川２km と横手川に合流する滝ノ沢川１．５km、沼山沢川２km とし、調査項目を、①「カジカガエルが住んでいるか」②「水温」③「ＣＯＤ」④「指標生物による水質階級」⑤「川の様子と周辺環境」⑥「その他気付いたこと」として写真やビデオ撮影を行いました。

カジカガエルは「渓流のカエル」と呼ばれ、山間部の水がきれいな渓流に住み、日本に住むカエルの中でも美しい鳴き声が特徴で、古くから飼育されてきました。

研究の結果、横手川では上ノ橋から学校橋にかけての愛宕山側の湧水の中にのみカジカガエルのオタマジャクシを確認しました。個体数が少なく大人のカエルを見ることは出来ませんでしたが、後日、２～３匹のオスのカジカガエルの鳴き声を聞くことができました。この場所は、江戸時代の地図にも記されている「御台所清水」が流れ込む区域で、夏でも水温が２０℃と冷たく、ＣＯＤも５mg0/1、水質階級Ｉでした。

滝ノ沢川の調査では、調査区域のほぼ全域でカジカガエルの生息を確認しました。滝ノ沢川では、砂防堰堤の設置、都市砂防事業での改修が行われており、生態系の回復が図られています。残念ながら沼山沢川での調査では、カジカガエルの生息を確認できませんでした。

飼育観察からわかったことは、カジカガエルのオタマジャクシは、カモンバなどの藻を

食べ、動物性のエサは全く食べない、完全な草食性でした。習性では、ガラス面や石に口器で吸い付く習性があり、泳ぎが大変速い。水温・水質への適応を調査すると、カジカガエルは水温が２８℃を超えると元気がなくなり、３日くらいで死んでしまいました。

これらのことから、カジカガエルの生息条件が分かってきました。

Ａ　川が渓流状になっていること。川底に泥が無く、石の表面に藻が生えやすい環境であること。

Ｂ　日当たりがよいこと。藻の生育がよいこと。

Ｃ　川に隣りあわせで、草むらや雑木林等の天然林が存在すること。

Ｄ　水温が２４℃以下、ＣＯＤが１０以下、水質階級がⅡ以上であること。

Ｅ　天敵がいないこと。

Ｆ　上記の環境が、少なくとも４年以上保たれていること。

カジカガエルは、水温、水質、エサとなる植物、周辺の環境等、さまざまな要因が整っていなければ生息できない生き物だと分かりました。横手川本流でカジカガエルが生息できる環境がある場所は、かなり上流までさかのぼらなければなりませんので、その意味では、横手南小学校正面にある学校橋の下(川原)は貴重な場所だと言えます。

最後に、かじかっこクラブからの提案で発表を終わります。

１．横手川の東の原っぱに名前をつけて、保護活動を進めていきたい。

２．滝ノ沢川にゴミや排水が流れ込まないよう下水道整備を市や県にお願いしたい。

３．カエルの飼育や観察ができる場所を学校につくり、もっと生き物に親しみたい。

４．夏の夜にカジカガエルの声を聞くイベントを開き、環境を守る大切さを伝えていきたい。

（イ）「いのちの水２００８　山内の河川の環境を考える１１」
横手市立山内中学校自然観察グループ

山内中学校では、平成４年に開催された「ふるさと集会」で、きれいだと思っていた山内地区の川が汚れてきている現状が報告され、以後１５年間、山内地区の水質調査に取り組んできました。

今回は、平成２０年度から過去４年間の結果と比較して「どのように変化しているのか？」を全国水生生物調査のホームページを参考に、指標生物の分布調査を行いました。

河川に生息する水生生物は、水質汚濁の影響を反映しており、それらの水生生物を指標として水質を判定することができます。

調査方法は、川底の石に付着している水生生物を採取するとともに、川から流れてくる水生生物を網で採

取します。採取した生物を種類ごとに分類し、出現した生物の種類と固体数を記録します。

平成２０年度の調査は、７月上旬から９月中旬まで行い、調査河川もこれまでと同じ横手川と黒沢川としました。横手川は山内の奥にある甲山を源流とし、大仙市角間川で雄物川と合流します。また、黒沢川は、国道１０７号線に沿って流れ、大松川ダムからの松川と落合で合流したあと相野々で横手川に流れ込みます。

現地での採取調査を行った後、川の状況を元に戻してから、学校で出現状況をグラフ化し、河川地図としてまとめます。調査地点、確認された生物、水質階級毎に棒グラフ化しました。

平成２０年度の調査結果は、横手川上流に流れ込む「桑の沢木川」では水質階級ⅠとⅡの生物が発見され、特に階級Ⅰの「ヘビトンボ」が多く確認されました。横手川と合流する三又地区では各階級の生物が発見され、水質階級Ⅲの「ヒル」が発見されましたが個体数は少なく、階級Ⅰの出現生物が多いことから水質階級Ⅰであると言えます。元南郷小学校付近では、水質階級Ⅰ、Ⅱの生物が多く見られ、特に「ヒラタカゲロウ」が多く確認できました。黒沢川の下岩瀬付近では、水質階級ⅠとⅢの生物が見られました。平成１９年度の調査では見られなかった「ヒル」が発見されたことから、栄養塩の流入が多くなってきたことが考えられます。その下流の落合付近でも階級Ⅰ、Ⅲの生物が発見されました。水質階級Ⅰに判定できるものの、個体数が少なく追加調査が必要と思われました。黒沢川が横手川に合流する相野々地区ですが、階級Ⅱ、Ⅲの生物よりも「ヘビトンボ」等の階級Ⅰの生物がはるかに多いことが調査で分かりました。

過去の調査との比較では、平成１９年度に「カワニナ」の個体数が多く水質階級Ⅱに判定された三又地区が水質階級Ⅰに復活し、その他の地点も全て水質階級Ⅰに判定されました。しかし、階級Ⅲの「ヒル」が多くの地点で発見され、個体数も多く見られるようになっています。元南郷小学校付近では、水質階級Ⅰで推移しているものの、個体数の減少が見られました。落合付近では出現生物数は変化していませんが、過去５年間を比較すると若干減少しています。相野々付近では、各階級の生物が多く確認されています。水質階級Ⅲの「ヒル」が５年間毎年確認され、平成２０年度は以前よりも多く確認されていることから、水質階級Ⅰで判定されていますが、階級の低い生物が多く、今後も継続して調査を行わなければならないと感じました。

５年間を通じた横手川の水質は、水質階級Ⅰの「きれいな水」と判定されたものの、各階級の出現生物数の数及び個体数が減少の傾向にあり、多くの地点で階級Ⅲの「ヒル」が確認されたことから、「水質階級Ⅰだから川の水はきれいである。」とは断定できない状況です。今後は指標生物の分布調査だけでなく、パックテストを用いた調査を実施し、さらに詳しい水質環境についての調査を実施したいと考えます。

最後に今後私たちは、①「研究結果の発表を通じて、地域の人たちの意識を変える」②「研究内容の継続性を高める」③「河川のクリーンアップを計画し、自然環境の保全に取り組む」ことを実施し、横手川上流の水質の監視を続けるとともに、山内中学校の特色ある活動の一つとして継続したいと思います。

（ウ）「川舟と雄物川」
横手市立雄物川中学校

私たちは、「総合的な学習の時間」の学習テーマに「雄物川」を選びました。私たちの町の名前となっている雄物川は、自分たちの暮らしと密接に関係していると思ったからです。

学習を進めるうちに、雄物川で漁に使用している川舟を作っている佐々木養助さん、雄物川で漁をしている佐藤政彦さんと出会い、川舟造りのお手伝いをしたり、川漁のお話を聞くことができました。

川舟造りのスタートは原木を探すところから始まります。今回は雄勝の山を探し、９ｍの原木を切り出しました。原木は、特殊な技術のある製材所で板状にしてもらい、１年程かけて乾燥させます。

船底は、製材した２枚の板を合わせて作ります。板と板をしっかり合わせるため、砂時計型の「ゆいご」と呼ばれる木材(継手)をはめ込みます。次に船底に「側板」と呼ばれる横板を、水が漏れないように船釘でしっかりと打ち付けます。

川舟の製作で一番難しいのが「舳先」の部分です。船底の前の部分をジャッキで持ち上げ、濡らしたタオルごしに強く火を当てて弓形に固定します。舳先の後は舟の後ろを作ります。舟の形にあわせて板をはめ込み、接着剤で固定し、川舟の形が整います。

全長９ｍの長さは、川の流れに負けない安定感を生みます。川舟の幅は、川の流れに合わせて上流地域では狭く作り、下流の地域では広く作るため、今回製作した川舟は雄物川地域の独自スタイルとなっています。

雄物川で漁をしている佐々木さんからは、雄物川に生息する魚のこと、漁のことについて教えてもらいました。また、魚を獲るだけでなく、放流していることや川のクリーンアップをしていることも聞きました。

私たちの先人は、川舟を使って他の地域と物資のやり取りをし、豊かな雄物川からたくさんの恵みを受けていたことを知りました。自分たちも雄物川の自然を大切にしながら、活用して行きたいと感じましたし、ゴミを捨てない、クリーンアップ作業を実施するなど、できることから行動して行きたいです。

（エ）横手川は、交流の源

横手川水辺のふれあいフェスタ実行委員会　副会長　下タ村　正樹　氏

横手川水辺のふれあいフェスタは、横手川の「ふるさとの川モデル事業」の完成をきっかけとして、平成１４年５月１日に実行委員会が設立され８年が経過しました。

当実行委員会は、横手川を愛し、横手川から元気を発信する団体の集合体と言えます。横手川の恵まれた自然環境を見直し、ふるさとの川、水源の森、豊かな水環境の場を創造するとともに、景観保全の活動を地域住民や子供達に受け継いで行くことを設立の目的として、構成団体や参加者の数を増やしながら年間を通じて活発な活動を展開しています。今年度も、横手川と水環境を考える会を始めとして、１９の民間団体と横手市、横手市教育委員会、秋田県平鹿地域振興局等の行政機関が緊密な連携をとっています。

このように多くの団体で構成されていますが、実際の事業は活動内容毎に部会を設置して実施しています。各部会は「横手川等クリーンアップ部会」や「横手川紫陽花回廊運動部会」等、８部会で企画運営されています。

今年も５月に実行委員会総会が終わり、今年度の事業を計画的に行っています。

５月には参加者約 5,000 人で「横手川等クリーンアップ」を行い、６月には「鮎の稚魚の放流」や「横手川グラウンド・ゴルフ大会」、「ホタルの夕べ鑑賞会」、「紫陽花回廊まつり」を行っています。

「ホタルの夕べ鑑賞会」は、横手川支流の清水沢川で行われ、清水沢町内会の方々が積極的に活動されており、ホタル保護の先進地視察や専門家を招いて「生育環境改善」についての学習を行い、(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成による生物調査を行ってきた結果、６月上旬から１ヶ月間ホタルが乱舞するようになりました。来年度からは、横手川流域でホタルが多く見られる地域の方々と「ホタル勉強会」を開催したり、「ホタルマップ」の作成を行いながら、市民に感心を持ってもらう活動をして行きたいと張り切っています。

「紫陽花回廊まつり」は、横手川と横手川沿いの市街地を「あじさい」で結ぶ運動で、市民に「あじさい株主」となっていただきながら、その株数は 1,000 株を超えました。１株 100 円の協力金を頂戴し、植栽から管理まで継続して株主の方々に行っていただいています。今後は「あじさいフォトコンテスト」の他に、俳句や短歌の愛好家の皆様に協力をいただき「横手川を詠む」イベントや「あじさい茶会」、横手川の延長がマラソンの距離に近いことから「横手川紫陽花回廊マラソン」の開催等、夢いっぱいの企画を考えています。

そして本日(７月２５日)は、「よこての全国線香花火大会」が横手川の河川敷で行われます。外国産に押されて衰退した国産の線香花火を多くの方々に体験していただきながら、

ふるさとの夏の思い出として残る情緒豊かなお祭りを開催したいという有志が集まり開催したのが第１回目で、今年が６回目になります。年々、ボランティアスタッフも増え、大会を盛り上げてくれています。

この後も、「横手川でラフティング」、地域の森に入り、森林の良さを体感する機会を提供しながら、水源の森の意識付けを目的とする「森林体験エコ・ウォーク」、２月には横手川と水環境を考える「水環境研修会」を開催します。

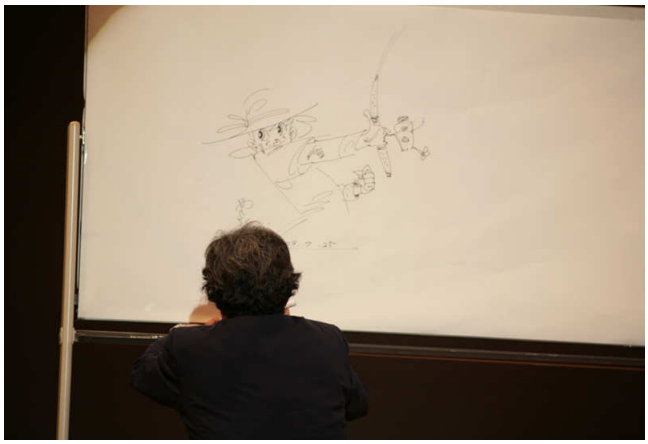
このように、１年を通してさまざまな事業を行っており、実行委員会としても大変な「やりがい」を感じていますし、各種のイベントに新しい参加者が増えているのも成果だと思います。

田舎にあっても地域のコミュニケーションが不足がちと感じています。横手川という１つのキーワードで人と人との繋がりを今以上に拡大して、源流部、中流・市街部、下流部で特色あるイベントを地域の皆さんと企画し、支援して行きたいと考えています。更なる思いは、この実行委員会を若い世代に引き継ぎ、地域を支えてくれるような人づくりや交流の輪を拡大できればと思います。また、全国各地で同じような取組を行っている団体との交流を図りながら、内容の充実を図って行きたいと思います。

横手川の自然環境を十分に活用した「環境教育プログラム」を開発しながら、既存の施設を活用して横手川の流域を「河川環境教育の場」として展開して行ければ、さまざまな交流も生まれ、地域も元気になり、新たな雇用の場を創出できると考えています。

⑥　記念講演

○　テーマ　「あるがまの川」
○　講演者　矢口　高雄　氏
（漫画家　代表作「釣りキチ三平」　自然をテーマにした作品を多く描く）



講演冒頭、代表作である釣りキチ三平の主人公・三平を描く矢口氏

みなさんこんにちは。矢口高雄でございます。

今日の僕のタイトルは「あるがままの川」ということで、このサミットの講演を承諾した時にこのタイトルを入れといたのです。タイトルを見ればわかるとおりに、「あるがままの川」、何も足さない、何も引かないあるがままの姿こそ三平君が求めている川であると言いたい訳です。

今日は、私は世界の各地に川を見てまいりましたけども、私が体験してきたあるがままの話とその体験を二つ三つお話してみたいと思います。

《中国での体験》

釣りキチ三平は昭和 48 年～昭和 58 年まで 10 年間少年マガジンで、これは昭和版の三平で現在は平成版釣りキチ三平というのをこの 9 年ぐらい書き続けています。昭和版が終わった昭和 58 年というと 1983 年ですからね、今から 26 年前ということになりますかね。

その 26 年前の三平が終わって間もないない頃に、テレビ局から「中国を釣る」というテレビ番組を作りたいので、釣り人兼リポーターとして出演してくれないかというお話をいただいたわけです。僕のこの中国行きというのは 3 週間だった。それを半年くらいの間に 3 回やったわけです。その中のひとつで狗魚(ゴウユイ)というのを狙ったんですね。狗は実は中国では犬のことです。犬の魚って言うくらいですから狗魚というのは犬のような牙が生えたものすごい野生の猛魚なわけです。日本で言えばカワカマス、英語で言えばパイクって言います。大物になると 1mを超えるというものすごい獰猛な魚なんですね。これを釣りにもう 50ｋｍも行くとソビエトになるっていうくらいの満州の奥地に入っていったわけです。

広大な満州平野が続いている、はるか彼方に大興安嶺がかすんで見える。そこは大湿原地帯でもあります。ちょうど釧路湿原なんかを空撮したときに川が蛇行するようなのをご覧になったことを皆さんもあると思うんですけど、あの何十倍も広いところが満州の湿原地帯だと思えばいいです。そこで 11 日間狙ってたったの 1 匹も釣れない。しかもそれテレビで放映する番組を作りにいているわけですから魚が釣れないことには番組ならないわけですよね。もう今日もだめだなと思っていると僕のリールが悲鳴を上げていました。なんと 86ｃｍの大狗魚が喰らいついてきた。そんなわけで、たった 1 匹 86ｃｍの大物狗魚を釣り上げてこの番組はどうにかなったというわけです。

そこが終わって残りの 1.5 週を利用して今度はさらに奥地の黒竜江を越えればもうすぐソビエトだよって言う山奥に行ったんです。ここではイトウという魚を狙ったんです。中国では哲羅魚(ジョウロウユイ)っていうんですけどね。日本で言うとイトウです。ロシアではタイメンって言いますね。日本では北海道の釧路湿原とか、それから道北のほうに行きますとサロベツ原野のあたりには今も多いとはいえない個体が残っております。大変絶滅が危惧される種類だと思いますけど、大きいのになると 1mを超えるんですね。これを狙ったんですよ。結果論としては釣れませんでした。残念ながら我々が行ったときにはすでにモンゴルの彼方のほうに哲羅魚は上ってしまったのでしょうかね。産卵のためどんどん上ってくんですね。ですからそのあたりでもやっぱり中間に当たるわけですから、なかなか出会えるというのは難しかったということなんです。

《ロシアでの体験》

2003 年の話ですけれども、日本旅行社と少年マガジンが提携しながら、カムチャッカからチャーター便を呼んで、直行便を出してもらって、「カムチャッカの釣り」というのをやろうということで募集したら、人が集まってきちゃうんですね。カムチャッカに行くというと日本だとユジノサハリンスクを経由で行くと丸 2 日かかっちゃうわけだけども、僕らは日本で始めてロシアのダリアビア航空をチャーターして釧路に直接呼んだわけです。2 時間 10 分で着いちゃうんですね。でも、特別チャーター便というのが飛んだのはこれ 1 回

きりで、今はそういうツアーやってませんけども。カムチャッカ半島というところは、広さは日本の 1.2 倍あるんです。そこに人口が 35 万人くらいしかいない。そのうちの 30 万人がペトロパブロフスク・カムチャツキー市っていう州都に集中しているわけです。ということは、ほかの国土の大半は人が住んでいないわけですよ。極寒の北のほうに行くともう人間も住むような環境でないというところが多い。人が住んでないってことは道がないから川に釣りに行こうかといっても行けないわけですね。軍の払い下げたヘリコプターを準備して、大体 20～25 人くらい乗れるような大型ヘリコプターでしたね。これに乗って釣りの一行が飛び上るわけです。だって道がないんですもん。何百キロか飛んでは、川を見つけながらそこにスッとヘリコプターで軟着陸するんです。「さあ、着きましたからどうぞ釣ってください。」と言うんだけども、誰も一歩足を出そうとしない、なんでかって言ったらこのカムチャッカと言うところは人口は 35 万人しか住んでないけども、そのうちの 30 万人はカムチャツキー市にあってあとはほとんど人が住んでいない、住んでないところはヒグマの住処なの。だから僕らヘリコプターをチャーターしながら飛んでいくと、ヘリコプターの運ちゃんが面白がってね、グーッと急降下して我々に見せるわけだ、熊が草原をドドドッと逃げていくんだ。そんなのを見せられて「さあ、釣ってください」と言ってもね。もう手も足も出ないって状態なんですね。でも、このチャーター便には必ず向こうのスタッフが乗っていまして、そのうちのキャプテンが自動小銃を持っている。それを肩にかけて、「私の後についてきてください」ということをロシア語で言っているわけです。そうやっていよいよ鉄砲一丁に守られながら、我々は勇んで川で釣るわけですけども、ルアーを一投するごとにヒットするんですね。そのヒットする魚が、ドリーバーデンっていう魚が一番多かったんですけども、日本語でいえばオショロコマ、イワナの一種。北海道のイワナはせいぜい 25ｃｍ、それがカムチャッカに行くと 60ｃｍ～70ｃｍぐらいにでかくなるんですね。ニジマスなんかも釣れましたけどもこれも半端じゃない大きさなんです。

《まとめ》

長々とお話をしてきましたけども、中国でもカムチャッカなんてところはましてやヒグマの巣の中で釣ったわけですからまさに「あるがままの川」だったんですね。何も引かない何も足さない、「あるがまま」、三平が求めてやまないものがここにあったかなとつくづく思いました。わずかの時間でしたが私の話を静かにうなずきながら聴いて下さり本当にありがとうございました。

川サミット万歳！！

⑦　サミット式典

会長である横手市長五十嵐忠悦が「第１８回全国川サミット in 横手　共同宣言」を読み上げ、参加自治体及び雄物川流域県南自治体の代表者とともに川の恵みを後世に引き継ぐことを宣言しました。

続いて、会長から、次期開催地の兵庫県加古川市長にサミット旗が手渡されました。

第１８回全国川サミット in 横手　共同宣言を、会長である横手市長が読み上げる

次年度開催地の兵庫県加古川市長にサミット旗が引き渡されました

第１８回全国川サミットin横手

共　同　宣　言

私たちは、秋田・山形県境に源を発し、横手盆地を北上しながら日本海にそそぐ母なる川「雄物川」の流域に集い、川がはぐくむ『ひと・まち・こころ』をテーマに「第１８回全国川サミットｉｎ横手」を開催しました。

川の豊かな恵みを享受し、文化や伝統を築きあげた先人に深く感謝し、豊かな川は、豊かな人間と豊かな社会をつくるという共通認識を持ちながら、参加自治体の友好と親善を深めました。

全国川サミットは今年で１８回の開催を数えました。一級河川と同じ名称や一級河川の流域にある全国の自治体が一堂に会し、川と地域の係わりや川との共生の方向を探ると共に、川を活かしたまちづくりに連携して取り組んでいくことを確認し、川の恵みを後世に引き継ぐことを共に誓い、ここに宣言します。

１　私たちは、豊かな生活と文化をはぐくむため、川との共生と川を活かしたまちづくりをすすめます。

１　私たちは、地球環境の保全と改善のために、生活を潤す美しい川と森林を守り、豊かな水辺空間の創出と保持に取り組みます。

１　私たちは、先人の苦労と治水の歴史を教訓に、流域の豊かな自然と安全なくらしを次世代に伝承します。

１　私たちは、川がはぐくむ「ひと・まち・こころ」の精神を、全国の川を愛する人々に伝えていきます。

１　私たちは、川が人と人を結び付け、地域の発展の源であることを確認しながら、全国川サミットの輪を広げる活動に取り組んでいきます。

平成２１年７月２５日

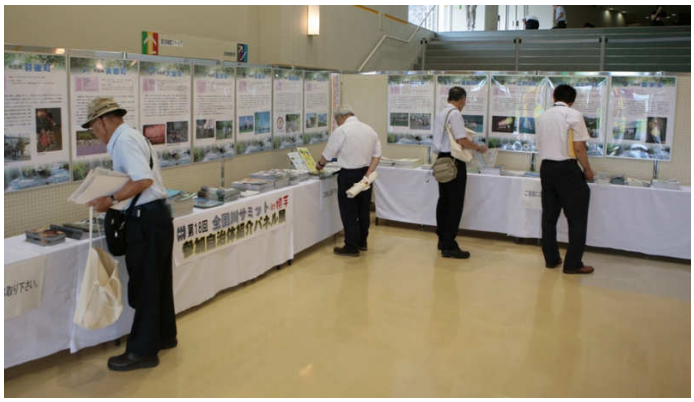
第１８回全国川サミットin横手参加者一同
代表　横手市長　　五十嵐　忠悦

⑧　展示等

上畑温泉さわらびと秋田ふるさと村において、参加自治体及び雄物川流域県南自治体の紹介コーナーを設置しました。

また、秋田ふるさと村では国土交通省の雄物川流域パネル展、岐阜県揖斐川町のいび茶の特別出展や雄物川流域県南自治体の物産販売が行われました。

総会会場に設置された
自治体紹介コーナー



秋田ふるさと村に設置された
自治体紹介コーナー

国土交通省　雄物川流域パネル展

岐阜県揖斐川町のいび茶
特別出展

雄物川流域県南自治体の
物産販売

⑨　よこての全国線香花火大会

全国川サミットin横手の関連事業として、第６回よこての全国線香花火大会が開催され、会場となった横手川の蛇の崎川原は浴衣姿の家族連れなど約３，０００人で賑わいました。安価で多く流通している外国産の花火ではなく、伝統的な国産花火を楽しんでもらおうと始まったこの大会。会場では約１２，０００本の国産線香花火やたくさんの手持ち花火が無料で配られ、歓声をあげながら色とりどりの花火を楽しむ姿が見られました。

童心に返って国産の花火を楽しむサミット参加の皆様

３）　７月２６日（日）－第３日目－
①　全国川サミットｉｎ横手記念植樹式

全国川サミット in 横手の開催を記念し、雄物川河川公園に参加自治体の代表者が桜（ソメイヨシノ）３本を植樹しました。

記念樹の前で

②　川舟進水式、伝統漁再現

事例発表にありました横手市立雄物川中学校の生徒が作製した川舟の進水式を行いました。神事の後、生徒たちの手で川舟を雄物川へ進水し、体験乗船しました。

生徒たちの手で無事、進水「バンザーイ!!」

体験乗船の様子

横手市の県南漁協の皆様には、川舟を使った伝統的な漁を披露していただきました。

③　わくわくフェアｉｎ雄物川

全国川サミットin横手の関連事業として、わくわくフェアin雄物川が開催されました。
たくさんの家族連れで賑わう中、気球の体験飛行、カヌー体験、イワナのつかみ取りなど多彩なイベントが行われました。

Ⅲ　第１８回全国川サミット in 横手を振り返って

今回のサミットでは、“川がはぐくむ「ひと･まち･こころ」”のテーマの下、さまざまな企画が行われました。

首長サミットでは、参加自治体の代表が川とまちづくりについて、熱い思いを語り合いました。基調講演を行った石川好先生は、川と文明の関係を独自の視点で解き明かし、今後も日本人のくらしは川と水とのかかわり無しでは成り立たないことを示してくださいました。また、矢口高雄先生には、中国やロシアでの釣紀行の体験を踏まえ、あるがままの川のすばらしさを語っていただきました。

さらに、事例発表では小中学校の児童生徒が、身近な自然と川を生物や水質調査から興味深い成果を披露してくれました。伝統の川舟づくりの体験は、生徒たちにとって郷土を知る良い機会になりました。横手川ふれあいフェスタ実行委員会の活動報告では、独創的で行政に頼らない活動が地域に根ざしていることが明らかになりました。

平成９年に第６回川サミットを開催した旧雄物川町（現横手市雄物川町）の河川公園では、今も大勢の市民参加による河川公園で川とふれあうイベントが行われており、川サミットの精神が息づいていることを紹介できたものと思います。

市町村合併の影響等により、川サミットの参加自治体数が伸び悩み傾向の中、新潟県長岡市が次回サミットからの正式参加を決定し、次々回の開催を表明していただいたことはありがたいことです。

私たち第１８回全国川サミット in 横手参加自治体は、今サミットにおいて採択した共同宣言の実現にあたり、今後も情報交換と連携を深めてまいります。

第18回
全国川サミットin横手

川がはぐくむ
「ひと・まち・こころ」
～山と川のあるまちから～

発行　第 18 回全国川サミット in 横手実行委員会
〒019-0529　秋田県横手市十文字町字海道下 7
横手市建設部建設監理課内
電話 0182（42）5112
E-mail　kensetsu@city.yokote.lg.jp